

巻頭言

今年度の文学部・文学研究科教育促進支援機構（以下、支援機構）は、コロナ禍とともに始まり、コロナ禍とともに終わると言ってもよい。この時期の昨年の状況を思い出してみると、2月初めには国内での感染者は僅かであり、まだ中国で流行っている病気というのが多くの人の認識であった。支援機構でも例年通りに3月末から4月初めにかけての新入生向けの企画が計画され、開催に向けて学生たちは準備を進めていた。3月30日、4月3日に「履修相談会2020」、続いて4月4日、5日には「新入生歓迎オリエンテーション2020」が久々に学内で行われる予定であり、学生スタッフは知恵をしぼっていた。2月の運営委員会資料を開いてみると、こうした企画案の報告が行われていたことが分かる。ところが、3月に入ると感染者数が増え始め、3月3日に新型コロナウイルス対策特別措置法が公布、13日には施行された。急激に大学内でも危機感が増し、卒業式の短縮開催が決定し、恒例のパーティーも中止となった。支援機構でも3月上旬には「新入生歓迎オリエンテーション」の中止を決め、「履修相談会」は動画配信での開催に変更することになった。時間をかけて準備していた学生スタッフにとっては辛い決断であったが、英断に違いない。

4月に入ると、新入生ガイダンス、そして入学式も中止となった。7日には緊急事態宣言が発出され、前期授業は開始が5月半ば、原則遠隔で行うことになった。新入生が大学に一度も登校することがないまま大学生活を始めるといって、前代未聞の事態であった。上級生も戸惑ったことだろうが、新入生の戸惑いと不安はそれ以上に大きかったことだろう。そのような中、支援機構が企画・編集したコンテンツ（履修解説動画、冊子 web 版「履修の解体新書」）は、新入生にとって頼りになる情報を提供することができたようだ。履修登録、時間割作成などは一人ではなかなか難しいところがあるが、支援機構作成のコンテンツは指針として大いに役立ったということだ。

4月当初、感染リスクの問題もあり、例年どおりの活動を行うことは難しく、規模縮小や企画数の削減などが必要になるのではないかと考えていた。しかし、「履修相談会」の代替措置として考案された解説動画や冊子の配信は、対面の代替以上の成果があったように思う。学生たちの熱意と創意工夫に溢れたコンテンツであった。この成功が学生たちに「遠隔でもよい企画が可能である」と認識させ、この後、「オープンキャンパス」「コース・大学相談会」「進路ガイダンス」「卒論セミナー」と、次々遠隔での企画案が出され実施されていった。また、例年オープンキャンパスで配布されている『文学部案内』も、すべて遠隔での編集作業となったが、無事7月末に刊行された。現在は、同様に『フォーラム人文学』18号が編集中である。また、来年度の「新入生歓迎・履修相談会2021」の準備もオンライン形式を念頭に進められている。

現時点ではコロナ終息時期は見通せないが、コロナ禍で培われた新しいノウハウは、コロナ終息後にも活かされ、支援機構の活動の可能性を広げると期待している。

文学部・文学研究科教育促進支援機構
2020年度 会長 高島葉子
(表現文化コース教員)